
大乱闘スマッシュブラザーズ ～ゆっくり行こうよ～

風来人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大乱闘スマッシュブラザーズ ～ゆっくり行こうよ～

【Nコード】

N2467Z

【作者名】

風来人

【あらすじ】

とある世界に彼らは呼ばれた。

その者達は世界で知らないものはいないほど有名、相応しい功績を立てている。

そんな中で彼らは別世界の住人と”乱闘の世界”へ足を踏み入れる。その中で彼らは別世界の住人と戦いを楽しむ。

だが戦いが全てではない――――――

平凡な生活にも楽しみがあり、キャンプ、クリスマス、祭りなどを
楽しむ。

もちろん彼らの生活は普通。

食べて、遊んで、戦って、寝る。

そんな平凡で平凡ではない彼らの世界、とくにご覧あれ――――

住人解説

登場人物

マリオ

知らない人はいないと思うヒゲの人。
この小説では少しボケキャラ、キノコが好物でキノコに関する知恵はとんでもない。

ドンキーコング

とても歴史のあるキャラ。
バナナに目がなく野生児。
食欲の旺盛さはトップクラス。

リンク

ゼルダの伝説などの主人公。
真面目で礼儀正しい、そして強さはトップクラス。
キレるとサムスも手を付けられない。

サムス

メトロイドの主人公。
そして女性である。
非常にキレやすい。そして凶暴。
リンクがキレてない限り一番強い。

ヨッシー

ヨッシーのたまごなどで主役を務める。

穏やかな性格で食欲旺盛。

それが原因なのかカービィと仲が非常に良い。

カービィ

のんびりとした性格で細かい事を気にしない。

食欲旺盛。そしてヨッシーと仲が良い。

つまみ食いの達人。

フォックス

方向オンチ。

射撃の達人で獲物を取ってくる唯一の食の生命線を繋ぐキャラ。

ピカチュウ

大のイタズラ好き。

時にそれが建物の破壊やメンバーの体を脅かす。

意外と腹黒い。

1話 集え！異世界の戦士（前書き）

どうも記念すべき一話です！

この話はまだ初代スマブラの設定で最初の八人しかいません。

後々追加していくので宜しくお願いします！

1話 集え！異世界の戦士

”とある世界”にある建物があった。

それは少し町から離れで人が住んでいる痕跡は全くない。

そのような建物から離れたある所。

赤の帽子のMマークの目立つ人物が全力疾走で建物に向かっていった。
時々土から生えているキノコを拾い食いしながら走っていた。

そんな様子が続く事数分……

彼は建物の所にやって来た。

彼は額にしわを寄せる。

「……此処か？」

疑うのも無理は無かった。

明らかに人が住める状態では無かった。

彼は手に持っている地図を何度も何度も見てその度にしわを寄せる量が増える。

と、再び地図を見ようとした時だった。

「よゝこそ諸君！！」

彼しかない空間にやかましい声が響く。

「……諸君と言われても俺しかないんだが……」

驚きよりも呆れの方が多い口調で答える。

「………へ？ 待て。何故貴様しかない、マリオ!!」

逆に謎の声の方が驚きを隠せてない。

「いや……だって他のメンバーの事お前俺に教えてないじゃん。」

沈黙の中、よくある寂しそうな風音が響く。

「………そうでしたっけ？」

「それだから俺しか来てないじゃねーか!!」

謎の声の疑問に我慢の限界を超えマリオと呼ばれた人物が切れる。
そして一人しかない空間で空を見ながら怒鳴る姿は非常に滑稽な
物でもあった。

やがて冷静になったのか

「………すまぬ。では他の七人が揃うまで個室で待機しといてくれ。」

「ああ。いつまでも言い争っても仕方ないしな……」

お互いに停戦(?)状態になった。

マリオは建物の中に入り再び沈黙が流れる………

マリオは退屈していた。

たった一人で待つことが退屈だった。

「……早く来ねーかなあ……」

そう呟きながら一人しりとりを始めてしまった。

「……しりとり、リング、ゴリラ……」

その時だった。

「邪魔するぜー!!」

マリオにとって聞き覚えのある声だった。

「……もしや」

そういうないやボロボロの廊下を走り出し玄関へ向かった。

「いやあー久しぶりだなマリオ!!」

その生き物はそう言って手に持っていたバナナを食べる。

「久しぶりではないと思うんだかドンキー……」

「あれ? そうだったか?」

マリオの反論に疑問を抱く。

「まあいいか！久しぶりに会えたからな！！」

「さっきの言葉はどうしたんだよ……」
ドンキーの言葉に呆れるマリオだった。

「……で他の奴らは？」

上の階から大声で尋ねるドンキーに対し

「知らん。お前心当たりあるか？」

逆に尋ねる始末だった。

「さあな！どうせどつかのお偉いさんでもくるんじゃねーか！？」

マリオは食事をするらしき広間で休憩していた。

だが上は向けなかった。

上でドンキーが探索しゴミなどが落ちて来るからだ。

「お偉いさんねえ……」

マリオが呟いた。

「たのもー！！」

来た。

二人はその人物を見ようと我先にと

蹴り。

殴り。

投げ飛ばし。

避けながら玄関へ到達した。

「……大丈夫ですか？」

その人物が見たものは

後ろでボコボコにされた泣いているマリオを後ろに笑顔で迎えた少し毛が禿げているドンキーの姿があった。

「……ど、どうも……」

「……で名前は？」

ドンキーが問う。

「ええっとリンクと申します。……ところで先ほどの人物は？」

「あ、あれ？ マリオだ。」

慌てふためきながらドンキーが答えた。

「あれがマリオさんですか……なんか違和感ありましたね……」

「……………」

リンクの後ろでもものすごい恨めしそうにドンキーを睨むマリオの姿があった。

「ところでリンクと言えば勇者だよな？」

後ろからボロボロのマリオが問う。

「は、はい……」

マリオの姿にビビりながらも答えた。

「……なる程。ドンキー、ちょっとこっちへ来い。」

ドンキーは一瞬ためらったが近くにリンクがいたので不安を抱えながらもマリオの所へ行った。

「なあドンキー、俺少し思ったんだが……」

「な、なんだ？」

少し間合いを取りながらドンキーが尋ねる。

「噂をする度に誰かくるんだが……」

「……どういう意味だ？」

全く意味が分からず額にしわを寄せる。

「お前は俺がしりとりでゴリラと言った瞬間、リンクはお偉いさんと言った時に来た。」

「……つまり何が言いたいんだ？」

イライラしながらドンキーが尋ねる。

「噂をしまくればそれに関連する人物がくるんじゃないか？」

「だがリンクはお偉いさんだろ？」

それとなんの関連性が……」

「……勇者。」

「……なる程な！ お前天才だな！」

「普通思いつくだろ……それと……」

「何だ？」

すっかり安心してしているドンキーにマリオは近づき……

「これはさっきのお返しだああ！！！！」

足を掴みフルスイングしながら豪快にドンキーを壁に叩きつけた。

「げぼはあ！」

その言葉を最後にドンキーは倒れた。

マリオは満面の笑みを残しその場を後にした。

「……で、他に心当たりあるかリンク？」

先ほどの場所に戻って来たマリオがリンクに問う。

リンクは本読んでいた。

「いいえ……特に心当たりはありませんね……」

本を一旦閉じてマリオの問いに答えた。

そしてドンキーの方に顔を向けた。

「……先ほど断末魔らしき言葉が聞こえたのですが……」
気まずい沈黙が流れる。

「……じゃああってたら気絶した。」

「……でも先ほど「これは返しだ〜!!」とかなんとかなんとか……」

「あ、あれか？ あれは……」

リンクの問いに追い詰められたマリオは言い訳らしき言葉を考えようとウロウロと歩き回っている。

やがて言い訳が思いついたのか

「そう！ 柔道の返し技を実戦で解説してたら壁に衝突したんだよ
!!」

「なる程！ ドンキーさん、とんだ災難ですね」

「ま、まあな！ あははは……」

さっきのお返しという所を突っ込まないか心配してたが納得してく

れたので胸をなで下ろすマリオだった。

太陽が下り始めようとしている時間帯。

噂をしないといけないのかやはり誰も来ない。

そしてドンキーは気絶から回復していた。

「……噂するか？」

衝突にマリオが尋ねた。

「……噂しろったってなかなか当たらないもんだぞ……」

思いつかないまま結局雑談を始めた。

「……確かリンクには馬がいなかったか？」

「ええエポナですね。移動に困った時はよく乗せて貰いましたね。」

その時だった。

「お邪魔しまゝす！」

ドンキーがいち早く駆け出した。

その後をマリオが追っていった。

「ヨッシー……！」

マリオとドンキーがほぼ同時に叫んだ。

「あっマリオさんとドンキーさん！」驚きを隠せない様子で叫んだ。

「リンク、紹介する。ヨッシーだ。」あとから駆けつけたリンクに紹介するマリオだった。

「どうも初めまして。」

「こちらこそ初めまして。」

改まっているリンクに紹介を続ける。「俺もヨッシーには何度か乗せて貰っているんだ。リンクで言えばエポナだな。」

「なる程!」

「……あと四人か。」

再び広間に集結した四人が噂を始めた。

だがなかなか来ない。

「……少しご飯にします。」

ヨッシーが荷物の中から常人ではない量の食料を取り出した。

「……」

リンクは絶句してたがマリオとドンキーは何事もないように会話を続けた。

「相変わらず凄い量だなヨッシー。」

だがこれが普通の量と答えるヨッシーに対して

「……大食いを超えてますね。」

「ああ俺も最初見た時はビビった。なんせ敵も食べるんだからな。」
そう言ってる間にも先ほどの量は半分に減っていた。

と、不意に外で何かの墜落する轟音がした。

マリオ達に激しい揺れが襲った。

「地震か!?!」

大慌てで椅子から立ち上がるマリオ。

だが揺れはすぐに収まった。

「何だったんだ？」

ドンキーが疑問を抱いたが長くは考えられなかった。
何故なら。

「皆さん！！ 外を見てください！」

とリンクが叫んだ所の窓を見ると……

「……星？」

「外に行って見ましょう！」

四人は外にいた。

その四人の視線には墜落している星があった。

「流星星の正体ってこれか？」

「いや違うと思うんですが……」

ドンキーが星を軽くノックした。

すると星の真ん中らしき部分が開き桃色の物体が姿を見せた。

「……なにコレ？」

四人が突っついたりつねったりするがピクリとも動かない。

そしてヨッシーが再び空腹を感じてきた。

「少しご飯にします……」

そういった瞬間桃色の物体がピクリと反応した。

「ご飯！？ どこどこ！？ どこにあるの！？」

そう言いつつ周りをキョロキョロ見渡した。

「あの……」

リンクが声をかけようとするが一向に気がつかない。

「おい！ こっちに注目しろ！」

ドンキーが軽くその物体を叩いた。
気づいた。

「どこどこ……！　ってあんた達だれ？」

「それはこっちの台詞だ。」

謎の物体の問いにマリオが問い返す。

「僕？　僕カービィ。宜しく。」

「……でカービィさんあなたも呼ばれたのですか？」

リンクがカービィに問う。

「うん。結構遠かったからお腹が空いた。」

こいつの頭には飯しか頭に無いのか。

そう思いつつ次の噂を始めた。

「……でカービィさん他に思い当たる人は？」

広間らしき所で椅子に座りながらリンクがカービィに聞いた。

カービィは特にと言う答えを返しながらヨッシーと食い物を奪いあっていた。

と不意に自分の荷物からバナナを取り出そうとしていたドンキーが尋ねた。

「ところでカービィの場所ってどんな所だ？」

カービィが右手に持っているリングを食べながらププランドと答えた。

カービィの話によればその国は特にこれと言った事件が無くみんなノンビリ過ごして居る。

その国にはデデデという大王がいてその城にはワドルディが雇われていると言う。

と、退屈していたのかマリオがいない。
どうせ戻ってくると全員全く気にしなかった。

一方。

マリオは近くの森でキノコを探していた。

食べられるキノコだと即食べて、食べられないキノコは即燃やした。
やがて満腹したのかある程度キノコを採取し帰ろうとした時だった。

「……ん？」

マリオの視線の先に狐がさまよっていた。

「おい！」

軽く声を掛けた。

すると慌てながらその狐はマリオの方に近づいて

「よかった！ この近くにとある建物があるんだがどこにあるか知らないか！？」

「あ、ああ……」

いきなり道案内をする事になった。

そしてすぐに着いた。

そしてその狐は礼を言いながらその建物に入ってしまった。
マリオもその建物に入ってしまった。

戻ってこちらでは……

誰かが入って来た。

その気配に真っ先に感づいたのはリンクだった。

もしかしたら命を狙う人かもしれない。

リンクは腰にあった剣の鞘を払いカービィ達にジェスチャーを行う。

そして廊下を物音をたてずに歩き侵入者に斬り掛かった。

寸の所で止めた。

マリオだった。

驚いたリンクは剣を落とした。

マリオの足の前に落ちた

「マ、マリオさん！？　すみません！　悪気は無かったんです！」
リンクが慌てて言い訳をしようとしてたが、すっかり腰を抜かして
しまったマリオは何かを言おうと鯉のように口をパクパクさせた。
だが何も言わずに気絶した。

「…………で、俺に斬り掛かったって訳か。」

気絶から回復したしたマリオは椅子に荒々しく座りリンクを睨み付けていた。

「俺じゃなかったら今頃お前逮捕確定だぞ、なあフォックス？」

フォックスは顔を青ざめさせながら頷いた。

リンクは冷や汗が止まらなかった。

「フォックスってどんな人物？」

カービィの問いに対してフォックスは簡単に言えば雇われ遊撃隊と答えた。

ふーんとカービィはそれ以上聞かなかった。

フォックスに心辺りが無いか聞いてみたが案の定無かった。

だが彼らに取って予想外の事が起こった。

「すみません！」

突然の訪問にフォックスを除く誰もが驚愕の顔を浮かべた。

噂をせずに誰か来たのだ。

そんなKY野郎は何処だとばかりにフォックスを除く全員額にシワを寄せながら荒々しく足音をたてて玄関に訪れた。

誰もいない。

代わりに小さい箱が置いてあった。

「……なんなんだコレは？」

テーブルの上に置かれた荷物を六人が覗き込みながらドンキーが尋ねた。

爆弾、食べ物、プレゼントなどと様々な意見を出し合ったがどれも当てはまる気配が無い。

仕舞にはヨッシーが

「ゲームカセットじゃないですか？ 格闘や育成とかの。」
と言う始末である。

マリオがゲーム機はと尋ねた瞬間だまりコクった。

結局我慢の限界に達した何名かが一気に箱を開けた。

箱の中には見慣れぬボールが入っていた。

マリオがボールを持った。

赤と白のボールだ。

「……玩具？」

考えに考えた末に出した答えであった。

と不意にマリオの後ろからフォックスが声を掛けた。

「うおっ!？」

いきなりの不意打ちに肩を上げ手が緩んだのかボールを落としてしまった。

カービィが飛びつくが短い足、短い手では届くはずがなかった。

ボールが地面に触れた。

機械的な音、眩い光と同時にボールが真っ二つに裂ける。

その中から黄色のネズミが現れた。

「ピカゝ……やっと着いたピカ！」

予想外の出来事に呆気にとられる六人のファイター達。

これは奇跡なのか怪我の功名と言うのか、はたまたまぐれなのか。それは自分の見方次第だった。

「はは……予想外すぎる……で、名前は？」

落ち着きを取り戻したドンキーが尋ねた。

「ピカ？ 僕の名前はピカチュウだピカ！」

元気よく答えたピカチュウの影でリンクが、なる程ポケモンか……と呟いていた。

「後一人! ……て奴らは？」

マリオが辺りを見渡す。

フォックスとリンクの姿は確認できた。
残りの四人がいない。

と、上から階段を下る音とその度にギシと木の音がしたと思うとカ
ービィが興奮しながらやって来た。

「凄いよみんな！ 二階には遊び部屋に倉庫、風呂、練習室、射撃
室もあるよ！ いやゝ本当何でもありだよこの建物！」
上から廊下を駆ける音がする。
どうやら残りのみんなは上で暴れているようだ。

「丁度いい。倉庫にみんなの荷物を入れて来よう。」
マリオの提案に文句は無かった。

そして野生児軍団を呼び寄せ荷物を整理し直していった。

その時ドンキーが決定的な発言をした。
その内容は

そーういや女性の参加者いるのか？

玄関のチャイム音と女性らしき声がしたと同時に、
リンクとヨッシーを除く者達の目の色が変わった。

その瞬間、倉庫には一人と一匹しかいなくなった。

下から怒鳴り声、うめき声、壁に叩きつける音、悲鳴、殴り倒す音。

そして断末魔の声を最後に一瞬にして全ての音が止んだ。

不安になった二名は様子を見に行った。

階段。

カービーが仰向けに倒れていた。

リンクは急いで居間で休ませようとした。

居間。

マリオの体がテーブルで叩きつけられたように地面にめり込んでいた。

泣きながらヨッシーが大慌てで助け出した。

そして片隅に真つ二つに裂けているテーブルがあった。

玄関へ続く廊下。

フォックスが頭から壁に突き刺さっていた。

見事な事に壁に対してフォックスの体は直角に突き刺さっている。

リンクとヨッシーは顔を見合わせた。

赤く染まった廊下を歩きそしてついに

玄関。

ドンキーとピカチュウが天井に突き刺さっていた。

どちらかが生き残る筈なのにこの奇妙な現象が起きた。

天井に二人突き刺さっている。

流石に自ら頭を突っ込む馬鹿はいないだろう。
なら原因はと考えつつリンクが扉を開けた。

機械に身を包まれた人物がいた。

「……………どちら様ですか？」

リンクが顔を玄関から覗かせながら尋ねる。

「あら、私？ 私はサムスって言うの宜しくね。」

機械に包まれた手が握手を求めた。

それに安心したのかリンクは姿を表し握手を返した。
そして尋ねた。

「ところでこの天井に二人突き刺さっている事について何か関わり
ませんでしたか？」

その答えはとんでもない答えだった。

「あら、あの二人なら私が仕留めたわよ。」

リンクが固まった。

だがそれに構わずサムスが会話を続けた。

「あの二人と来たら私とあった瞬間、なんだこのヘンテコな機械人

間？

と言いやがったの。少しイラッとしたから少し懲らしめてやったって訳。まああなたは欲のなさそうな人間だから大丈夫でしょうけど。」

サムスが笑った。

リンクにとってそれは悪魔の笑い声に聞こえたかもしれない。

リンクは無言で振り返った。

そこには二人を天井から下ろそうと必死になりながら飛んでいたヨッシーの姿がそこにあった……

リンクとヨッシーは学んだ。

コイツだけは怒らせてはいけなさと。
だがそれは心の中に留めて置いた。

怒らせると天井に突き刺さった二人のような末路になる事を知っているから。

怒らせると己の命は無いと知っているから。

1話 集え！異世界の戦士（後書き）

ええ、見て下さってありがとうございます。

一話にしてはぶっ飛んでますがそこは温かい目で見守ってください。

では次の話についてです。

作者は次話の内容は食料集めと考えています。

もちろん話には全く関係ありません。

ええ……

以上ですが何か？（おい

まあこれからも宜しくお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2467z/>

大乱闘スマッシュブラザーズ ～ゆっくり行こうよ～

2011年12月10日12時51分発行